

道元禪師と宏智頌古 (一)

黒丸寛之

はじめに

道元禪師の著述には、『宏智頌古』からの直接または間接の引用が数多く見られる。その中の直接的な引用については、鏡島元隆博士の『道元禪師の引用経典・語録の研究』に明らかにされているが、その他の間接的引用——例えば『宏智頌古』と『雪竇頌古』の両方に見られる公案で、道元禪師が『雪竇頌古』を批判的に提唱することによって、その本則の意味を明らかにしているもの、或は宏智の頌の字句を僅かに改めて『宏智頌古』とは別の公案の意味を示したものなど——に就いて、直接的な引用例と併せて取り上げ、禪師と『宏智頌古』についての宗義的な所見を加えてみた。但し、この考察の順序として『宏智頌古』の第一則から始めたものの、中には例えば第八則の「百丈野狐」の公案のように、『正法眼蔵』の二巻の撰述に及ぶものもあり、その宗義について詳細に参究することは、全体のバランスから見て適当でないと思

考し、提唱の骨子について触れる程度にとどめたものもある。したがって、問題として残るものについては、本稿の継続分を一応了えた時点で改めて取り上げたいと思う。

第一則 世尊陞座

挙、世尊一日陞座。文殊白槌云、諦觀法王法、法王法如是。世尊便下座。

『宏智頌古』の第一則の本則は、『雪竇頌古』第九十二則と同一である。道元禪師は『正法眼蔵王索仙陀婆』の巻と『永平広録』巻第三にこの本則を挙げているが、何れも雪竇の頌を提唱の素材にされている。『王索仙陀婆』の巻の、右の本則に続く提唱の部分は次のようである。

雪竇山明覚禪師重頌云、列聖叢中作者知、法王法令不_レ如_レ斯、衆中若有_二仙陀客_一、何必文殊下_三三槌_一。しかあれば雪竇道は、一槌もし渾身無孔ならんがごとくは、下了未下、ともに脱落無孔ならん、

もしかくのごとくならんは、一槌すなはち仙陀婆なり、すでに恠
麼人ならん、これ列聖一叢仙陀客なり、このゆえに法王法如是な
り、使得十二時、これ索仙陀婆なり、被十二時使、これ索仙陀婆
なり、索拳頭奉拳頭すべし、索弘子奉弘子すべし、しかあれども
いま大宋国の諸山にある長老と称するともがら、仙陀婆すべて夢
也未見在なり、苦哉苦哉、祖道陵夷なり、苦学おこたらざれ、仏
祖の命脈まさに嗣統すべし、たとへば如何是仏といふがごとき、
即心是仏と道取する、その宗旨いかん、これ仙陀婆にあらざらん
や、即心是仏といふは、たれといふぞと審細に参究すべし、たれ
かしらん、仙陀婆の築著磕著なることを。

こゝでは本則の文殊による「法王法如是」は、仙陀婆の築
著磕著として第一義の仏法が開演されている。すなわち、法
王法如是は一切衆生悉皆成仏の事実を示すものであり、それ
は吾亦如是汝亦如是であるとの見地から、雪寶の頌の「列聖
叢中作者知」は「列聖一叢仙陀客」に向上され、使得十二時
と被十二時使はともに索仙陀婆の行履として、我転法、法
転我と同様の意味に説示されている。そして、この本則に
おける如是の法、すなわち第一義の仏法が、明確に承当され
ていない大宋国諸山の長老等は、道元禪師からは当然批判の
対象となった。『王素仙陀婆』の巻では、彼等は仙陀婆の本質
的意義を開演する因みに批判されているにすぎないが、『永
平広録』では本則に対する視点の相違が明白に示されている。

上堂。挙、世尊一日陞座、文殊白槌曰、諦觀法王法、法王法如

道元禪師と宏智頌古(一) (黒丸)

是。世尊便下座。北塔祚和尚曰、文殊白槌報衆知、法王法令合
如レ斯、会中若有三仙陀客、不レ待三眉間毫相輝。門人雪寶重顯禪老曰、
列聖叢中作者知、法王法令不レ如レ斯、会中若有三仙陀客、何必文殊
下三槌。師曰、兩位尊宿、雖下三文殊一同参上、未下三世尊一同参上。
諸仁者、還要知下与三世尊一同参底道理上麼。獅子吼音師子知、法王
法一如レ斯、会中俱是仙陀客、更下三文殊両両槌。(卷三)

道元禪師が、右の両禅者の頌が文殊と同参であるのに対し
て、この公案は世尊と同参でなければならぬと説いている
のは注目すべきことである。そして、この著眼点の相違がそ
のまま仏法の把握の相違となつてゐることは、『雪寶頌古』
と対比して見ると、おのずから明かである。因みに『宏智頌
古』では「一段真風見也麼、綿綿化母理三機梭、織成古錦含三
春象、無下奈三東君漏泄二何上」と頌して、世尊を主として尽十
方界真実人体の様相を詠んでいることは、よく知られている
通りである。

第二則 達磨廓然

挙、梁武帝問三達磨大師、如何是聖諦第一義。磨云、廓然無
聖。帝云、对レ朕者誰。磨云、不識。帝不レ契。遂渡江至三少
林二面壁九年。

この本則は、『雪寶頌古』第一則の前半の部分に該当する
が、達磨大師と梁の武帝との相見という同一の素材に対し

て、宏智・雪竇両禪師の著眼点の違いを見ることができるとすなわち『雪竇頌古』第一則では、「……磨云、不識。帝不_レ契。達磨遂渡_レ江至_レ魏。帝後拳問_二誌公_一、……」とあって、後半は武帝と誌公(宝誌和尚)との問答になっている。したがって、宏智禪師は『雪竇頌古』の本則後半の部分を削除し、「面壁九年」の語を加えて本則を結んでいるが、この一語に達磨大師の仏法の本質を示していることは云うまでもない。この本則に見られる宏智・雪竇両禪師の拈提の相違は、頌にも明瞭にあらわれている。宏智の頌は、「面壁九年」の達磨の坐禅を詠じたものであることは周知のごとくであるが、雪竇の頌は次のようである。

聖諦廓然。何当_レ弁_レ的。对_レ朕者誰。還云不識。因_レ效暗渡_レ江。
豈免_レ生_二荆棘_一。闍国人追不_二再来_一。千古万古空相憶。休_二相憶_一。清風
匝地有_二何極_一。師顧_二視左右_一云、這裏還有_二祖師_一麼。自云、有。喚
来与_二老僧_一洗脚。

この頌では、最初に達磨と武帝との問答を挙げ、次に達磨と武帝について夫々述べたあと、雪竇の見解が示されるといふ順序になっている。したがって、達磨の仏法の本質が何であるかについては、必ずしも明らかにされていない。勿論この本則と頌は、達磨と武帝との相見の問答が主題であって、達磨の答にその真髓が示されていると見ることはできる。しかし、禅法を学ぶ立場からすれば、禅的境涯をあらわす言語

の端的よりは、确实なる禅修行の實際を示されることが望まれる。宏智禪師が、本則において本質的には必要でないと思われる部分を削除し、頌についても雑然たる拈弄をすてて、達磨の真髓を面壁坐禅として示したことは重要であると考えられる。

次に道元禪師の著述に就いて、達磨と武帝との相見に関する引用箇所を見ると、先ず『正法眼藏行持』(下巻)では相見の問答の後、

ゆえにこの十月十九日、ひそかに江北にゆく。そのとし十一月二十三日、洛陽にいたりぬ。嵩山少林寺に寓止して、面壁而坐、終日黙然なり、……しばらく嵩山に掛錫すること九年なり。人これを壁觀婆羅門といふ、史者これを習禅の列に編集すれども、しかにはあらず、仏仏嫡嫡相伝する正法眼藏、ひとり祖師のみなり。

と説かれていて、相見の問答についての提唱はなく、九年面壁の意義が示されている。この『行持』の巻の説示は、道元禪師からは、相見時の対応について仏法を論ずるよりは、達磨大師のその後の行持である面壁坐禅の意義を明らかにすることの方が、はるかに重要であったことを意味するものである。そして、このことは『永平広録』の上堂語においても、また同様であることを知ることができる。すなわち同書巻七に、

二十八祖菩提達磨尊者、不_レ辞_二万里_一、航_レ海三年、遂到_二振旦_一、……

……相見梁武、梁武不_レ重、祖遂出_レ國、入_三魏之嵩山、寓_三少室峰
少林寺、面壁九年。

と述べて、次に面壁坐禪が「仏祖単伝の仏法」であることが
明らかにされているが、武帝との相見の問答は特に取り上げ
られていない。

達磨の廓然無聖の話頭について、雪竇・宏智の頌古と道元
禪師の著述の該当する箇所はおよそ右のようであり、禪の
本質の把握にそれぞれの特色が見られる。宏智禪師が達磨の
真髓を「面壁九年」としたのは、看話禪全盛の当時としては
卓越した見識であると言わなければならない。また、道元禪
師に至って、その坐禪が仏祖正伝の仏法として提唱されてい
ることは、従来も既に指摘されていることではあるが、坐禪
の意義を知悉するにあたっては深く考慮すべきことであろう。

第三則 東印請祖

挙、東印土国王請_三二十七祖般若多羅_二齋。王問曰、何不_二
看_レ經。祖云、貧道入息不_レ居_三陰界、出息不_レ涉_三衆縁、常_二轉_三如
是_レ經二百千万億卷。

この公案は『永平広録』卷一、『正法眼蔵看經』及び『正
法眼蔵仏經』において取り上げられているが、本文に多少の
相違があるので列挙すると次のようである。

上堂。挙、東印土国王請_三般若多羅尊者_二齋次、王乃問、諸人尽_レ轉_レ
經、尊者為_三甚麼_二不_レ轉。尊者曰、貧道出息不_レ隨_三衆縁、入息不_レ
居_三蘊界、常_二轉_三如是_レ經二百千万億卷。師_二挙_三了云、更說_三道理_二看。

(永平広録卷一・流布本)

(註) 流布本の——の部分は、門鶴本では次のようである。

非_二但_一一卷兩卷、師曰、如是我聞信受奉行。

第二十七祖東印度般若多羅尊者、因東印度国王請_三尊者_二齋次、国

王乃問、諸人尽_レ轉_レ經、唯尊者為_レ甚不_レ轉。祖曰、貧道出息不_レ隨_三

衆縁、入息不_レ居_三蘊界、常_二轉_三如是_レ經二百千万億卷、非_二但_一一卷兩卷。

(正法眼蔵看經・岩波文庫)

第二十七祖般若多羅尊者道、貧道出息不_レ隨_三衆縁、入息不_レ居_三蘊

界、常_二轉_三如是_レ經二百千万億卷、非_二但_一一卷兩卷。

(正法眼蔵仏經・岩波文庫)

道元禪師のこの公案についての提唱は、『永平広録』では
右のようにきわめて簡潔であるが、『正法眼蔵看經』では
出息不隨衆縁について、また『正法眼蔵仏經』では轉經につ
いて、その宗義が開演されている。すなわち『看經』の巻には
いま尊者の渾力道は、出息の衆縁に不隨なるのみにあらず、衆縁
も出息に不隨なり。衆縁たとひ頂顛眼睛にてもあれ、衆縁たとひ
渾身にてもあれ、衆縁たとひ渾心にてもあれ、担来担去又担来、
ただ不隨衆縁なるのみなり。不隨は渾隨なり、このゆえに築著磕
著なり。

と説かれ、出息と衆縁の本来的關係が不隨として示される。
出息のほかには衆縁なく、衆縁のほかには出息のない道理が明ら

かにされているのである。この能所未分の尽十方界の行履が、般若多羅尊者の如是經の転読であるとするのであって、『仏經』の卷には次のように述べている。

かくのごとくの祖師道を聞取して、出息入息のところに転經せらるることを参学すべし。転經をするがときは、在經のところをしるべきなり。能転・所転、転經・經転なるがゆえに、悉知悉見なるべきなり。

如是經とは尽十方界の經卷であるが、この公案自体も道元禪師の提唱も、転經の眞実義を知悉し行取すべきことを説いていることは論ずるまでもない。そして『仏經』の卷では、右の語に続いて如浄禪師の垂示として「先師尋常道、我箇裏不用ニ焼香・礼拝・念仏・修懺・看經ニ祇管打坐、弁道功夫、身心脱落」の語を挙げて、「脱落の看經あり、不用の看經あることを参学すべきなり。」と述べていることは、看經・転經の参学を究尽するとき、脱落・不用の看經―すなわち不染汚・無所得の看經―を現成することを示すものと解することができるであろう。

第四則 世尊指地

拳、世尊与レ衆行次、以レ手指レ地云、此処宜レ建ニ梵刹ニ帝釈将ニ茎草ニ插ニ於地上ニ云、建ニ梵刹ニ已竟。世尊微笑。

この世尊と帝釈の公案は、『永平広録』第五卷の上堂語に

見られる。道元禪師は頌によって本則の大意を述べているが、それは宏智禪師の頌に基づいて作られたものであるから、次に両者の頌古を掲げてみよう。

宏智頌古

永平広録

百草頭上無辺春

明明百草更逢レ春

信レ手拈来用得親

拈ニ得一茎ニ用得親

丈六金身功德聚

丈六金身与ニ梵刹ニ

等閑携レ手入ニ紅塵ニ

蓮宮未レ染水中塵

塵中能作レ主

殿裡元為レ主

化外自来賓

堂中会レ接レ賓

触処生涯随レ分足

等閑従レ仏經行処

未レ嫌伎倆不レ如レ人

三界不レ如仏道人

(註)『永平広録』門鶴本は「丈六金身興ニ梵刹」と訂す。

『宏智頌古』『永平広録』ともに、第一句から第六句までは、公案に基づいて帝釈の無礙自在なはたらきと、世尊の随処に主となる化導の様子を詠んでいるが、就中『永平広録』では、『宏智頌古』第五、六句の塵中と化外を、殿裡と堂中として仏道修行の場に転じ、また第七、八句でも『宏智頌古』の禅者の生涯を頌する箇所を、『永平広録』では仏に従う仏道人とすることによって、仏法者の行履として叙べていることは、禅機よりも行仏道を重ずる道元禪師の、この公案に対する独自の見解を示すものといふべきであろう。

第五則 青原米価

拳、僧問ニ青原、如何是仏法大意。原云、廬陵米作麼価。

この本則に基づくと宏智禪師の頌は次のようである。

太平治業無_レ象 野老家風至_三淳

只管村歌社飲 那知_三舜德堯仁_一

道元禪師は、右の頌に各一字を加えた七言四句として、『永平広録』第八巻の解夏小参の結びにこれを挙げてゐるが、小参の主題は青原の答話ではなく、文殊三処過夏の公案である。『永平広録』による同公案は次のごとくである。

記得す。世尊昔因に自恣の日、文殊三処に夏を過す。迦葉、文殊を擯出せんと欲して、纔に椎に近づくと乃ち百万億の文殊を見る。迦葉其の神力を尽せども、椎を挙ぐる能はず。世尊遂に迦葉に問う、汝那箇の文殊をか擯せん。迦葉無對。(原漢文)

禪師はこの公案を拈弄し、第一義の仏法を開演した後

太平王業治無_レ象 野老家風似_三至淳_一

祇管村歌並社飲 争知_三舜德及堯仁_一

大衆久立 伏惟珍重

と結んでゐる。

また『永平広録』第六巻には「廬陵米価」についての上堂語がある。

上堂。大利小利、何免_三行市_一。王老師壳身即且致。廬陵米価、有_三

道元禪師と宏智頌古(一)(黒丸)

人酬_レ価麼。若無_三人酬_レ価、永平自売自買。良久云、如意摩尼満_三大千_一、争如独坐_三明窓下_一、不_レ知虚度幾光陰、知者不_レ修因_三什麼_一。

青原のいう廬陵米にいかなる価をつけるか——すなわち廬陵米の真価を見ることができるとかどうかを学人に問い、禪師自らはこれを売りこれを買うと説くのである。その自受用の風光は、偈の「如意摩尼大千に満つ、争か如かん、独り明窓下に坐することを。」とある両句に、青原において廬陵米として表現された本来の面目が、禪師においては自受用三昧の打坐として、端的に示されていると見ることが出来る。

第六則 馬祖白黒

拳、僧問ニ馬大師、離_三四句_一之絶_三百非_一、請師直_三指某甲西来意_一。大師云、我今日劳倦、不_レ能_三為_レ汝説_一、問_三取智蔵_一去。僧問_レ蔵。蔵云、何不_レ問_三和尚_一。僧云、和尚教_三来問_一。蔵云、我今日頭痛、不_レ能_三為_レ汝説_一、問_三取海兄_一去。僧問_レ海。海云、我到_三這裏_一却不会。僧拳_三似大師_一。大師云、蔵頭白、海頭黒。

『永平広録』第九巻に、この公案に附した頌がある。それは

離_三四句_一之絶_三百非_一 有_レ僧請益自精微

若非_三選仏場中士_一 誰見海蔵直指揮

とあり、道元禪師は馬祖のことには直接言及していないが、

馬祖・智蔵・懐海のそれぞれの道取が、四句を離れ百非を絶して西来意を直指したものであることを示している。馬祖及び海・蔵二師は何れも、いまこゝにおける自己の面目を示すとともに、祖師西来意は他に向って求むべきものではないことを明らかにしているのであるから、頌では「自ら精微」といふ「直に指揮する」と叙べている。序でながら「蔵頭白海頭黒」が、各々の本来の面目を指摘した言葉であることは言うまでもない。

第七則 薬山陞座

挙、薬山久不陞座。院主白云、大衆久思三示誨、請和尚為衆説法。山令打鐘。衆方集。山陞座、良久便下座帰三方丈。主随後問、和尚適来許三為衆説法、云何不垂一言。山云、經有三経師、論有三論師、争怪三得老僧。

薬山惟儼禪師のこの公案は、『正法眼蔵看経』及び『永平広録』第七卷・第八卷に挙げられている。『正法眼蔵看経』では、右の本則について

曩祖の慈誨するところは、拳頭有ニ拳頭師、眼睛有ニ眼睛師一なり。しかあれども、しばらく曩祖に拜問すべし、争怪ニ得和尚一はなきにあらざ、いぶかし和尚は何師。

とあり、什麼の師、すなわち師の面目(本質)を問うべきこと

を示している。もとより、曩祖に拜問することは、正師の真髓に参見することであって、その指摘は『永平広録』第七卷の説示にも見ることが出来る。『広録』における公案に続く上堂示衆には

師曰、要知三経師、論有三論師、争怪三得老僧上麼。汝争怪得、老僧是師、汝是弟子也。要知三和尚適来許三為衆説法、如何不垂三一言三麼。雷声遠震。所以道、不垂三一言三也。

と見え、薬山の正師としての存在と、雷声遠く震う打坐の宗風が宣揚されている。

また『永平広録』第八卷の結夏小参には、『宏智頌古』に基づく頌が附されているが、両者の頌古は次のようである。

宏智頌古
凝兒刻レ意止啼銭
良駟追風顧ニ影鞭一
雲掃ニ長空ニ巢レ月鶴
寒清入レ骨不レ成レ眠
永平広録
家兒所レ得実金錢
良馬非ニ唯待ニ影鞭一
誰識薬山無ニ此語一
雖レ然今古競流伝

『宏智頌古』は、故事を用いての文学的表現によって薬山の禅境を頌しているが、『永平広録』では、四句を貫いて薬山の無此語、すなわち不思議を行ずる打坐の世界が詠まれていることが明瞭である。

第八則 百丈野狐

挙、百丈上堂、常有ニ老人、聽レ法随レ衆散去。一日不レ去。

丈乃問、立者何人。老人云、某甲於過去迦葉仏時、曾住此山。有字人問、大修行底人還落因果也無。對佗道、不落因果。墮野狐身五百生。今請和尚代一轉語。丈云、不昧因果。老人於言下大悟。

百丈野狐の公案は、『正法眼蔵』では「大修行」の巻と「深信因果」の巻の何れも初頭に示され、道元禪師独自の提唱が見られるが、「この一段の因縁、天聖広燈録にあり」（深信因果）と記されているように『天聖広燈録』からの引用であって、『宏智頌古』の本則よりはかなり長文である。しかし「深信因果」の巻には「宏智古仏かみの因果を頌古するにいわく」として、宏智禪師の頌が挙げられていることから、禪師は『宏智頌古』を併用してこの公案を示衆されたことが明らかである。のみならず、「いま不落不昧商量也、依然撞入葛藤窠の句、すなわち不落と不昧とおなじかるべしといふなり、おほよそこの因果、その理いまだつくさず」と述べて、『宏智頌古』の二句を取り上げて宗義を述べていることが知られる。

この公案における不落因果と不昧因果については、二通りの見方が成り立つようである。すなわち「深信因果」の巻では

しかあるに参学のともがら、因果の道理をあきらめず、いたづら

に撥無因果のあやまりあり。あはれむべし、澆風一扇して祖道陵替せり。不落因果は、まさしくこれ撥無因果なり、これによりて悪趣に墮す。不昧因果は、あきらかにこれ深信因果なり、これによりてきくもの悪趣を脱す。あやしむべきにあらず、うたがふべきにあらず。近代参禅学道と称するともがら、おほく因果を撥無せり。なによりてか因果を撥無せりとする。いはゆる不落と不昧と一等にしてことならずとおもへり、これによりて因果を撥無せりとするなり。

と述べているのに対して、「大修行」の巻では

不落因果の道は墮野狐身なり、不昧因果の聞は脱野狐身なり、墮脱ありといへども、なほこれ野狐の因果なり。しかあるに古来いはく、不落因果は、撥無因果に相似の道なるがゆえに墜墮すといふ。この道その宗旨なし、くらきひとのいふところなり。たとひ先百丈、ちなみありて不落因果と道取すとも、大修行の瞞佗不得なるあり、撥無因果なるべからず。またいはく、不昧因果は、因果にくらからずといふは、大修行は超脱の因果なるがゆえに脱野狐身すといふ。まことにこれ八九成の参学眼なり。

と説いて、「深信因果」の巻の所説とは逆に不落因果の道取は撥無因果ではないとするのである。「深信因果」の巻は、その奥書によれば「建長七年乙卯夏安居日、以御草案書之、未及中書清書、定可有再治事也。懷舛」とあり、未再治の草案本であったことが知られるが、「大修行」の巻は、その識語に「爾時、寛元二年甲辰三月九日、在越宇吉峰古精舎示衆」と記されているように、寛元二年の春に示

衆されたものである。そこで、不落因果を撥無因果と見るか、超脱の因果と解するかは、大修行の行道如何にあると言えらるであろう。大修行とは、円因満果の修行——すなわち仏因仏果の修証のことである。『永平広録』第一巻の上堂語には「上堂、拳三百丈野狐話了、師乃云、山河大地野狐窟、受脱一枚皮肉骨、因果明明非已物、鷓鴣頻轉百花没。」と述べて、因果歴然の実相を説示しているように、仏祖単伝の仏法は、仏因を修して仏果を証することであるから、この修証(大修行)を撥無するものについては、「即心即仏是風顛、直指人心更隔天、三酌欲窮巨海水、一時勘破野狐禅」(永平広録第五巻)として斥けられることになる。

また『永平広録』第九巻には、次の頌古二首が存する。

修行不落其因果、鬼窟現前非老狐、鬼窟之中還一轉、山河忽化証前途、

可憐迦葉一尊仏、墮落野狐五百生、耳底倒聞師子吼、舌辺長斷等閑鳴。

次にまた『正法眼蔵随聞記』には「或時、并問て云く、如何是不昧因果底の道理。師云く、不動因果なり。云く、なんとしてか脱落せん。師云く、因果歴然なり。云々」(巻一)の問答があるが、この不昧因果の見解は、続いて南泉斬猫の話として示されているので、次の第九則に関連する問題である。

第九則 南泉斬猫

拳、南泉一日東西両堂争猫兒。南泉見遂提起云、道得即不斬。衆無对。泉斬却猫兒。為二兩段。泉復拳前話。問趙州。州便脱草鞋於頭上戴出。泉云、子若在恰救得猫兒。

南泉斬猫についての道元禪師の見解は、『正法眼蔵随聞記』巻一の第六節(岩波文庫・流布本)の「今の斬猫は是便ち仏法の大用現前なり、或は一転語なり。」の語に明らかにされている。すなわち、禪師は南泉の活作略を、大用現前して軌則を存せずという大修行の現成と見るのである。そして、「我れ若し南泉なりせば即ち云べし、道ひ得たりとも便ち斬却せん、道ひ得ずとも便ち斬却せん、何人か猫兒をあらそふ、何人か猫兒を救ふと。」と述べて、猫兒斬却の勢を示すとともに、また一面においては「大衆不对の時、我れ南泉ならば、大衆既に道不得と云て便ち猫兒を放下してまじ。」として、猫兒放下の手段あることを併せて示しているのである。禪師が「仏法の大用現前」というのは、このような把住放行・殺活自在の妙用をいうのであって、要は学人をして機先の眼を開かしめることにある、といえよう。したがって「此の斬猫兒、即是仏行なり」として南泉の行為を称揚すると同時に、「ただしかくの如きの料簡、たとひ好事なりとも無からんに

はしかじ。」と付言し、後学の模倣的行為を戒めている。また、この公案における趙州の卓抜な作用については、「後に趙州頭に草鞋を戴きて出たりし、亦一段の儀式なり。」と述べているように、因果に拘束されない無碍の対応を評価していることが知られる。『随聞記』における南泉斬猫の話頭は、懷辨禪師の「云く、かくの如くならば因・果を引起すや、果・因を引起すや」という質疑に対して垂示されたものであるから、果を待つ目的的な見解を否定する必要があったと考えると、この場合の南泉の斬猫と趙州の戴鞋とは、禅者の自由な作略と無作為の対応を示す恰好の話頭であったと思われる。）

また『永平広録』第九卷には、この公案を主題とする二首の頌古が収められている。

南泉有_レ道再_三行、趙老風流設_二陥坑_一、也識死猫尊貴者、長扶_二話柄_一、
断_二疑情_一。

池陽提_二起猫兒_一道、道得猫生否不_レ生、且道南泉聽也未、両堂雲
納_二雷声_一。

因みに南泉斬猫の公案は、『雪竇頌古』（のちに碧巖録）では、第六十三則の「南泉斬猫兒」及び第六十四則の「趙州頭戴草鞋」として収録され、従って本則が二則、頌も二首となっている。序でに『宏智頌古』と対比してみると、次のようである。

宏智頌古

両堂雲水尺紛拏
王老師能驗_二正邪_一
利刀斬断俱亡_レ像
千古令_二人愛_二作家_一
此道未_レ喪 知音可_レ嘉
鑿_レ山透_レ海兮唯尊_二大禹_一
鍊_レ石補_レ天兮独賢_二女媧_一
趙州老有_二生涯_一
草鞋頭戴較_二些些_一
異中来也還明鑑
只箇真金不_レ混_レ沙

雪竇頌古

（南泉斬猫兒）
両堂俱是杜禪和
撥_二動煙塵_一不_二奈何_一
頼得_二南泉能拳_レ令
一刀兩段任_二偏頗_一
（趙州頭戴草鞋）
公案円来問_二趙州_一
長安城裏任_二閑遊_一
草鞋頭戴無_二人會_一
歸到_二家山_一即便休

道元禪師は、右の『雪竇頌古』を直接に取り上げているわけではないが、『随聞記』の上述の項に「亦大衆に代て云ん、和尚只一刀兩段を知て一刀一段を知らずと。辨云く、如何是一刀一段。師云く、猫兒是なり。」という説示が見られる。『雪竇頌古』の「一刀兩段任_二偏頗_一」の句は、南泉の傑出した力量を頌したものであるが、しかし一刀兩段というときには、斬るものと斬られるものとの能所関係において見られ易い。そこで、この斬猫兒が仏行であるためには、相対的立場（世法）を超えて、一刀一段として示すことが適切であるとされたのであろう。この一転語は、公案に因んで一法究尽の道理を示す禪師独自の道取といふべきである。